

## ストックホルム国際水研究所、国際連合大学及び在日スウェーデン大使館共催セミナー 「水：気候変動対策といのち輝く未来社会への鍵」 イベントサマリー

2025年5月16日、ストックホルム国際水研究所（SIWI）、在日スウェーデン大使館と国際連合大学は、大阪・関西万博期間中のカール16世グスタフ・スウェーデン国王来日に際し、水管理の重要性に関するセミナーを開催しました。地球規模の水循環や水資源を研究する第一人者であり、昨年のストックホルム水大賞を受賞された東京大学の沖大幹教授のご協力のもと、健全な水資源管理と気候の相互関連についての認識を高めることを目的として企画いたしました。

ストックホルム水大賞は「水のノーベル賞」とも呼ばれ、水分野において世界で最も権威のある賞のひとつ。カール16世グスタフ・スウェーデン国王が後援者であるスウェーデン王立科学アカデミーの協力により、ストックホルム国際水研究所が毎年受賞者を決定しています。今年の大阪・関西万博のメインテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」との親和性も高い内容となりました。

SIWI / Swedish Water House 理事、トーマス・レーベルマルク氏が司会を務めた本セミナーには、水と環境に強い関心をお寄せになるカール16世グスタフ・スウェーデン国王と天皇陛下がご臨席されました。冒頭の歓迎の辞では、国連大学学長チリツィ・マルワラ教授がスウェーデンと日本はイノベーションと持続可能性の取組みにおける世界のリーダーであること、今年の大阪万博の精神に則り、両国の戦略的パートナーシップは共通の価値観と未来への共通のビジョンに基づいていると述べました。国連大学学長の講演に続き、駐日スウェーデン大使ヴィクトリア・リー氏が開会の辞を述べ、気候変動対策における水管理の重要性を強調しました。リー大使は、沖教授が2024年にストックホルム水大賞を受賞されたことに触れ、スウェーデンと日本が環境研究、特に水分野において共にコミットすることの重要性を強調しました。18世紀の植物学者、カール・ツンベルクの来日に始まった両国間の歴史的・学術的な繋がりが、その後の日・スウェーデン科学技術協定、そして昨年12月に締結された戦略的パートナーシップにつながっています。

最初の基調講演は、名誉ゲストである沖大幹教授によって行われました。沖教授の基調講演はセミナーの雰囲気盛り上げ、水、気候、持続可能性のつながりについて聴衆に啓発しました。沖教授は、水管理と水資源管理に関する様々な概念を共有し、人、自然、インフラといったすべての構成要素が、こうしたシステムの健全な機能に責任を負っていることを示しました。沖教授は、「みんなのインフラ」に由来する「ウォーター・ミンフラ」という概念を提示し、資源管理への統合的アプローチと、あらゆる交差点が持続可能である必要性を強調しました。さらに、沖教授は、気候変動、健康、災害の影響が社会に既に顕在化していることの深刻さ、そして水が気候変動緩和の触媒として機能することを強調しました。基調講演では、気候変動に伴う社会経済的な道筋とコストをさらに強調し、持続可能な未来と公正な移行への投資の必要性を訴えました。

基調講演の合間には、SIWIの中心的存在であり、沖教授にとって大きなインスピレーションの源でもあった故マリン・ファルケンマーク教授を偲ぶセッションが行われました。ファルケンマー

ク教授の最後のビデオインタビューの一つが上映され、近年の水への取り組み方の変化や、水循環の認識に関する先駆的な研究が取り上げられました。ファルケンマーク教授の研究は、水へのアクセスにとどまらず、河川や流域、そしてその管理の新たな現実にも焦点を当てており、この後にアナウンスされた「世界湖沼の日 (World Lake Day)」との結びつきが強いものでした。

ファルケンマーク教授の動画上映後、内閣官房水循環政策本部事務局長 国土交通省水管理・国土保全局水資源部長 齋藤博之氏より、昨年12月第79回国連総会で制定された8月27日「世界湖沼の日」について正式発表がありました。これにより、「世界湖沼の日」は、毎年ストックホルムで開催される世界水週間と同時期に開催されることとなりました。

2つ目の基調講演では、SIWI マリン・ルンドベリ・インゲマルソン博士が最新の研究論文「ネットゼロへの不可欠な一滴 (“The Essential Drop to Net-Zero”）」の調査結果を発表し、気候変動緩和の取り組みにおいて淡水が果たす役割、ひいては生態系の保全、生物多様性のある景観の保護からエネルギーシステムの脱炭素化まで、私たちの生活の未来社会を左右するアプローチを詳しく説明しました。インゲマルソン博士はまた、森林と景観の再生を通じた現場での活動、森林をベースとした緩和策の研究、そしてグリーンウォーターのプラネタリーバウンダリーの設定など、報告書の発表以来、彼女自身とSIWIの活動について共有しました。

この日最後の基調講演は、東京大学サステナビリティ学連携研究機構教授の福士健介氏による、「人的および財政的資源の観点から見る水と気候変動」をテーマに行われました。福士教授は、日本における経済優先の傾向、そして水質汚染の歴史にも見られる傾向を強調。また、水バリューチェーン全体への投資の必要性とメリットについても説明しました。福士教授は最後に、社会、経済、気候変動の課題をより効果的に対処するためには、適切な水の評価するシステムを確立し、様々な業種でより多くの投資を誘致する必要があると強調しました。

水資源を大切にすることの重要性は、セミナー後半の企業発表でも繰り返し強調されました。スウェーデンのアルファ・ラバル社 CEO トム・エリクソン氏は、気候変動対策における産業界の関与の必要性と、自社の生産拠点における炭素問題、および水不足への責任ある対応へのコミットメントを発表。さらに、エリクソン氏は PFAS 汚染、その毒素除去のためのソリューションを経済的にロールアウトする必要性、そして工場などにおける水管理の効率を高める新しいバルブ技術についても言及しました。

日本企業からはサントリーホールディングス株式会社のサステナビリティ経営推進本部長、瀬田治道氏が登壇し、サントリーの水資源管理、生態系の再生、地域社会との連携における取り組みを紹介しました。9カ国130万人以上が参加しているサントリーの幼児教育プログラム「水育」に触れ、企業が世界の水、人と自然のためにどうしたら積極的なパートナーとなることができるかを示しました。

セミナー最後のパネルディスカッションでは、カーヴェ・マダーニ 国連大学水・環境・保健研究所所長と今回のセミナー登壇者により、気候変動対策と未来社会における水の役割についてのインタラクティブな議論が行われました。世界経済と水の動き、景観再生、水資源ガバナンスを通じた社会的公正の推進、ウォーターフットプリントの削減、そしてビジネスモデルへの水の統合などについて意見が交わされました。

本セミナーは、カール 16 世グスタフ・スウェーデン国王と天皇陛下、産官学の代表者や学生、環境専門家など 200 人余りが見守る中、盛会裏に閉幕しました。本セミナーは、世界水週間、COP30、2026 年国連水会議などに向けて機運を高めるだけでなく、水資源の管理、そして気候変動対策における日本とスウェーデン間の連携をさらに強化する機会となりました。